

日本語の終助詞の意味論*
—「ぞ」「ぜ」を中心として—

4R-10

小野晋 中川裕志

横浜国立大学 工学部

1 はじめに

日本語の談話において終助詞の果たす役割は非常に重要である[Kaw91, TSS+90]。本稿では、計算言語学的な意味論を与える試みが殆んどなされていない終助詞「ぞ」「ぜ」について、考察する。

2 終助詞の意味を表す基礎概念

発話が行なわれるとき、話し手は、あらかじめ、「その発話の内容が話し手にとってどんなものであるか」という判断を行なっている。また、発話が聞き手目当ての場合は、「その発話の内容が聞き手にとってどんなものであるか」という判断(推測)も行なっている。我々は、終助詞はこのような判断を反映している、と考える。これらの判断には、話し手(または聞き手)が発話内容を「どれだけ強く信じているか」と、「意識しているかどうか」という、別な観点からのものがある。一次近似として、前者には信じる強さの強い順に「知っている」「知らないが信じている」「信じていない」の三段階(「知っている」は「信じている」に含まれるとする)、後者には「意識している/いない」の二段階がある、と仮定する。また、知っていることを「知識」、信じていることを「信念」と呼ぶことにする。詳しい定義は[ON93]を参照されたい。

3 終助詞「ぞ」「ぜ」の意味

終助詞「ぞ」「ぜ」と同様に肯定文を強調するような働きを持つ終助詞に「よ」があるが、これらの間には微妙な違いがある。まず、直観的に、終助詞「ぞ」「ぜ」は「よ」に比べて独り言に用いやすい。例えば、「行くよ」という発話が殆んど独り言ではあり得ないのに対し、「行くぞ/ぜ」という発話は独り言であり得る。そこで、このようなことに対応できるように、終助詞の「ぞ」「ぜ」の意味を表すには、話し手にも聞き手にもなり得る変数を用いると好都合だと考えた。また、「だろ+よ/ぜ」が可能で「だろ+ぞ」が不可能なことを説明するのに、終助詞「ぞ」には、「よ」「ぜ」と違い、意味論的に命令の働きを持つとすると都合が良いと考えた。そこで、本稿では、以下のような終助詞「ぞ」「ぜ」の意味を提案する。

(1) 発話「 ϕ -ぞ」の意味

*Semantics of Japanese Sentences Final Particles
—about zo and ze—

by Susumu Ono and Hiroshi Nakagawa,
Yokohama National University, Tokiwadai, Hodogaya-ku,
Yokohama 240, Japan.

1. 話し手は ϕ を知っている2. Vは、推論して ϕ を知識として意識せよ

2.で、Vは確認する人(以下、確認者と呼ぶ)である。(1)2.ではVが誰になるかは決まっていないが、終助詞は話し手の発話時における態度を表すので、確認者Vは話し手か聞き手になり、第三者にはならない。1.より話し手は ϕ を知識として意識しているの、文脈を無視する場合、確認者は話し手より聞き手になり易い。また、確認者Vが話し手になるためには、1.で話し手は既に ϕ を(知識として)意識しているの、 ϕ は話し手にとって確認のために推論を要することではなければならない。そのため、例えば、「眠いぞ」という文は、「(話し手が)眠いこと」が確認のために推論を要さないため、独り言にはならない。

以上のことを、終助詞「ぞ」の確認者に関する性質として以下のようにまとめる。

(2) 終助詞「ぞ」の確認者の性質

1. 確認者は、話し手より聞き手になり易く、第三者にはならない。
2. 確認者が話し手になるためには、 ϕ は話し手にとって推論を要することではなければならない

この(2)はデフォルト規則である。つまり、この(2)を覆すような強い要因が他になければいつも(2)が有効となる。

(3) 発話「 ϕ -ぜ」の意味1. 話し手は ϕ を知っている2. 話し手は「Cは ϕ を信念として意識していない」と信じている

Cを「意識者」と呼ぶ。Cも文脈により定まるのだが、(1)の確認者Vと同様の理由で、話し手が聞き手にしかならない。また、「 ϕ -ぜ」を話している話し手自身は発話時において ϕ を意識している筈なのでCは話し手には殆んどならず、聞き手になり易い。しかし、「今まで ϕ を意識していなかったが、突然知識として意識した」というような場合に限り、意識者Cは話し手にもなれる。このような場合、 ϕ は話し手にとって知識として意識するのに殆んど推論を要さないものである筈である。例えば、調子の悪い機械を調べて、部品が壊れているのを発見した時に、

(4) こりゃ駄目な筈だぜ。

という発話をする場合がこれに相当する。

以上のことを、終助詞「ぜ」の意識者の性質として以下のようにまとめる。

(5) 終助詞「ぜ」の意識者の性質

1. 意識者は、話し手より聞き手になり易く、第三者にはならない。
2. 話し手が意識者になる時は、 ϕ が殆んど推論を要さずに知識として意識できるものに限られる

(5)も(2)と同様のデフォルト規則である。

終助詞「よ」の場合は以下のようになる [ON93]。

(6) 発話「 ϕ -よ」の意味

1. 話し手は ϕ を知っている
2. 話し手は「聞き手は ϕ を知識として意識していない」と信じている

ところで、「 ϕ -ぞ/ぜ/よ」という発話が聞き手目当てになされる場合について、以下のことに注意されたい。確認者が聞き手の場合の発話「 ϕ -ぞ」は(1)2.により「聞き手は ϕ を知識として意識せよ」を意味論的に含意しているのに対し、意識者が聞き手の場合の発話「 ϕ -ぜ」は(3)2.により「聞き手は ϕ を信念として意識せよ」を語用論的に含意し、発話「 ϕ -よ」は(6)2.により「聞き手は ϕ を知識として意識せよ」を語用論的に含意している。そのため、 ϕ を伝える力は、「 ϕ -ぞ」「 ϕ -よ」「 ϕ -ぜ」の順に弱くなると、考えられ、(筆者の直観では)実際にそうである。特に、「 ϕ -ぜ」は「聞き手に仄めかす」ような表現である。

4 「だろう」と終助詞

終助詞「ぞ」は、終助詞「よ」「ぜ」と違い、概言の助動詞「だろう」に付加できないという特徴がある。本稿の終助詞の意味を用いて、このことを説明する。

まず、発話には、話し手がある状態なり event なりを評価した結果を表示するものと、話し手のある状態なり event なりを評価している心的状態そのものを直接表示するものがある。例えば、

(7) この本は難しい。

という発話は、主題(「この本」)について評価した結果を表すと考えられる。これに対し、

(8) この本は難しいなあ。

という発話は、終助詞「なあ」により、話し手が主題について評価していること自体を表すと考えられる。「前者はコト化でき後者はコト化できない」という具合に、この分類はかなりの程度にコト化の可能性と平行する、と考えられる。コト化できる表現は話し手がコトとして評価したことだからである。

概言の助動詞「だろう」は、コト化できないことから考えて、以下のような心的状態を直接表示する働きがある、と考えられる。

(9) 「 ϕ -だろう」の意味

1. 話し手は、 ϕ を推論している、かつ、
2. 話し手にとって、 ϕ はより強い信念となりつつあるが知識にはなっていない

発話「 ϕ -だろう-ぞ」は、Vを聞き手とすると、(1)2.より、(9)で表される話し手の心的状態そのものを「知識として意識せよ」と聞き手に命じることになるが、これは聞き手には不可能なので、理不尽な要求である。また、Vを話し手とすると、「話し手の心的状態そのもの」を話し手が確認することになるが、これは冗長である。そのため、「だろうぞ」という表現は出来ない。

発話「 ϕ -だろう-よ」は、「聞き手は(9)を知識として意識せよ」を意味論的に含意するわけではないので可能である。しかし、この無理な要求を語用論的には含意するので、「どうせお前にはできやしない」という感じの投げやりな表現になる。

発話「 ϕ -だろう-ぜ」も可能な表現で、比較的頻繁に用いられる。この場合は、まず、「 ϕ -だろう」は知識として意識するのに推論を要するので(5)2.より、Cは聞き手である。そのため、「聞き手は『 ϕ -だろう』を(知識としてではなく)信念として意識せよ」を語用論的に含意することになる。この要求は無理ではないので「だろうよ」よりは投げやりな感じが弱い。

5 おわりに

本稿では、終助詞の意味論について、特に終助詞「ぞ」「ぜ」を中心に、検討してみた。そして、本稿で提案した意味を用いて、「だろうぜ」「だろうよ」という表現が可能で「だろうぞ」が不可能な理由を説明することが出来た。今後は、発話行為と終助詞の関係、本稿で検討していない他の終助詞の意味論、終助詞間の共起関係等の言語学的な問題と、終助詞の意味の計算モデルの構築と機械上での実現という問題を、さらに検討する予定である。

参考文献

- [Kaw91] 川森雅仁. 終助詞と認知様相. 情報処理学会自然言語処理研究会報告 84-6, 1991.
- [Mor89] 森山卓郎. 認識のムードとその周辺. 日本語のモダリティ, pp. 57-120. ひつじ書房, 東京, 1989.
- [ON93] Susumu Ono and Hiroshi Nakagawa. Semantics of Japanese sentence final particles—about *ne*, *yo* and *na*—. In *Proc. of Natural Language Processing Pacific Rim Symposium*, 1993.
- [TSS+90] 土屋俊, 白井賢一郎, 鈴木浩之, 川森雅仁, 今仁生美. 日本語の意味論をもとめて. 月刊言語, Vol. 19, No. 1-12, 1990.